

OPI 上級話者から見た日本語プロフィシエンシー

楊柳・李陽（蘇州大学）

キーワード：OPI、問題点、改善策

1. はじめに

今年の1月に筆者らはOPIテストを受けた。本発表はOPIを受けた数日後にもらった録音に基づいてまとめたものである。上級レベルと判定されたが、目立った問題点があった。以下では3つの問題点を整理し、上級話者としての日本語プロフィシエンシーを考察し、改善策を検討する。

2. 問題点

2. 1 語学力の不足によるあまい言葉遣い

これについてはまず注目したのは語彙量の少ないことである。普段日本語の語彙の備蓄が少ないため、1つか2つの表現だけにこだわり、会話中ふさわしい表現が見つけれられない状況を生み出してしまふ。この問題について2人はそれぞれ9回と3回がある。例えば、「リハーサル」、「羽」、「籠」などの読み方をはっきり覚えられず、「蛇」と「エビ」、「家賃」と「夜勤」を間違え、笑える会話にしてしまった。それに、よく馴染まない表現が思い出せなく、言い換える表現を見つけようにもなかなか見つけれないことも、聞き手を混乱させる。この問題について2人はそれぞれ3回と2回がある。例えば、「座席」の代わりに「座るところ」、「ステージ」の代わりに「展示する空間」、「レイプ」の代わりに「女の子の体を傷つけました」、「双子」の代わりに「普通は一人を産みますけど、妹と弟は同時に生まれました」のような状況は時々あった。

意味不明な話にならないように、日常的に語彙量を拡充し、同じ意味を含める表現を収集し整理することが不可欠だと思われる。日本語の能力が足りなければ、どのような完璧なアイデアや考えも相手にはっきり届けないだろう。

以上論じた語彙量の問題は最も注目される場所であるが、ほかには言いよどみの過剰使用などのような問題も無視できない。言いよどみの使用自身には問題がないと思われるが、過剰に使うと話の流暢さが欠けてしまい、また聞き手に嫌味を招く可能性もあるのではなかろうか。例えば、筆者1人の言いよどみの使用は合計25回で、そのうち「あのう」は22回、「えっと」は3回出現した。もう1人は「その」を15回も使った。これらのデータによると、普段話すときに空白を埋めるために言いよどみを使うという習慣に関するものは窺える。また、日本語で話しているのに、思考中に日本語の「あのう」、「そうですねえ」と「えっと」などの代わりに、中国語の「うん」、「ああ」が突然に口から飛び出るともしばしばあった。会話中1人のそのような言いよどみの数を数えた結果、延べ23回も出現し、その中で「嗯」は18回、「啊」は5回を占めた。もう1人の延べ21回のうち、「呃」は14回で、「啊」

は7回だった。

この原因については、母国語である中国語から受ける影響が大きく、日本語でしゃべるときもつい中国語の考えで思考し、中国語の言語習慣もふと出てしまうためである。日本語であろうが、中国語であろうが、言いよどみを過剰に使用することには個人習慣の部分があるものの、そもそもこのようにたどたどしく、流暢に話すことができない状況も減点だと考えられる。そのため、細かいところであるが、普段話すときの習慣に注意し、できる限りこのような言葉を減らした方が聞き手にとって、聞きやすい話ができると考えられる。

2. 2 文法の間違いおよび言葉をまとめる力の不足

第2は安定したレベルで話すことの難しさである。この問題をもたらした1つの原因は文法の間違いだと思われる。文法がうまく覚えられず、話している時に、この表現は正しいのか、この言葉は本当に合っているかと心配しながら、何度も繰り返してチェックすることは度々あった。そのため、返事する時に連続した話ができなかったり、途中で急に切れたり、バラバラになってしまったりすることがあった。2人はそれぞれ3回と5回の文法の間違いがあった。

もう1つの原因は言いたいことを明確に伝える能力が低いことだと思われる。いわゆる簡潔でまとまった話で表現したいことを伝えられないことである。話者自身でもわからなく、一文にもならない話をだらだら言う傾向があり、何回解釈しても相手に伝えられない状況に陥りがちである。この問題について二人はそれぞれ3回と6回見られた。例えば、故郷を紹介したとき、話が容易に理解してもらえない状況があった。

例1：

テスター：どんなところですか。

楊：安徽省はあんまりみんなに知られないところで、で、安徽省はみんなの印象の中で、南の方ですけど、その川と山が北と右（南）の2部分に分けるので、

テスター：山と川？2つあるんですか？

楊：あ、川

テスター：うん？川？山がない？

楊：いや、あのう、南と北の地域を分ける川があるので。。

テスター：あ、そうですか。

楊：はい、そうです、安徽省は北の方と南の方…があります。

テスター：まあ、でも、どこでも北と南がありますよね。

楊：中国には南、南方と北方があるので。。あのう、その南方と北方を分ける川が安徽省の中にあ

るの。

例2：

(前略)

楊：はい。あのう、全部の知識を名詞にして、あのう、自分で解釈します。

テスター：全部の知識を名詞にする？意味わからない。

楊：あのう、先生がその1つの名詞をテーマ？テーマじゃないんですね。あのう、一問として、自分で解釈します。私は解釈します。

テスター：うん…なるほど、まあ、中国語の言葉への理解っていうん感じですか？

楊：うん…いいえ、あのう、全部天文とか地理とかあのう歴史とか文学とかの知識をその中の1つの名詞を解釈します。

テスター：じゃ、例えば、1つ例を挙げると？名詞って動詞じゃなくて名詞ですね？

というようなやりとりが見られ、会話がなかなか進められず、ただ話している内容を確認することで時間が過ぎてしまう。そもそも、よく変動し多様化する会話にいつでもどこでも対処できる手本は存在しない。私ども日本語学習者にとって、最も要求されるのは、さまざまな言語環境における自分自身の判断力と言語力だと思われる。

2. 3 文化理解の不足

第3は中日文化への理解不足である。言語交流といえ、やはり両国文化の触れ合いである。国特有の名称を知らなかったら、言語にも表現できず、コミュニケーションの障害になるかもしれない。二人ともこのようなことはそれぞれ4回あった。例えば、日本文化への不理解で、名称の正しい呼び方が言えなく、相手を困らせることがある。好きな推理小説と聞かれたとき、「白夜行」の正しい話し方も知らないのは、本当に好きなのかと疑われる恐れがあるのは当然だと思われる。また、国の固有名詞、有名な人物や場所の名前「蘇東坡」、「西湖」、「淮河」などを知らないことから、日々の積み重ねから語彙量の増加に一刻の余裕も許されない緊急性を深く感じた。会話が担っているのは言葉の裏に隠れている違う文化だと考えられる。言語学習者にとって、日本語がどのくらい上達できるのかは、結局身につける自国文化次第だと思われる。OPI テストの目的といえ、言葉を通じ異文化を越えて表現したいことが伝えられるのかを検定することだと思われる。

3. 改善策

以上述べたテストの中で現れ、減点になった問題に基づき、相手との会話を良く感じさせる技につい

て筆者なりの考えを述べる。

まず、相手に牽引されるのではなく、話題を自分の得意な分野または紹介したいことの方へ導くことが重んじられるべきだと思われる。ただ一方的に相手の質問に答えることは会話をくだらなくさせるだろう。さらに、会話の主導権を手に入れば、苦手な話題を避け、より一層自分の魅力を相手にアピールすることができると考えられる。それに、自信を出して大胆に大きな声で話すことも役に立てるだろう。二人はこの録音の中で、ある単語や文法をはっきりと覚えられないときについ声を弱め、テストターに確認しているような振りを繰り返した。本人さえ自分の日本語に自信を持っていないならば、ほかの人からも弱気しか聞こえないのではなかろうか。それゆえに、自分の能力不足を意識しつつ大胆に声を出し、考えをきちんと相手に伝えることができたら、着実に前に向けて進められると思われる。

前に述べたように、日本語の語学力をもって基礎を固め、両国の社会文化への理解を深める上で、会話のコツで相手との会話を順調に、楽しくすることも肝要だと考えられる。

今回受けた OPI テストを機会に、以前気がつかなかった不足点がいろいろ発見できた。OPI テストを受け、真剣に録音を聞きながら自分の足りない部分を分析し、自分の現在の力に直面し、補足することは自分に大切な経験を与えてくれるはずだと考えられる。